

た。最初の案は、評価に要する時間が掛かり過ぎることや評価基準が明確化されていなかったという問題があった。初案の問題を解決するため第2案では、評価項目を提出期限、模型製作、形態、研磨、接点、適合に関する7項目に減らし、時間の短縮を図った。また、教員間が一緒に評価することで採点のバラツキを改善することができた。評価基準においては、レベルの具体化を試みたが、赤点者が多くなる傾向にあった。そこで、学生の達成状況を踏まえて評価基準を見直し、教員の評価を学生にフィードバックするに至っている。今後は可視化、具体化、客観化できる指導法と評価基準を検討する必要がある。

木暮ミカ研究業績発表 一歯から口腔、そして全身の調和を探究する一

木暮ミカ（歯科衛生士学科）

今までの研究を踏まえ、歯科医療人全てが習得しなければならない「歯型彫刻」という実技実習の習得に関して、基礎科目でありながら臨床に即繋がるような有益性の高い教育方法の追求を継続していきたい。具体的には、発生学に基づき口腔全体を一臓器として把握したうえで機能美を追求することができるものを考案し、歯科技工士だけでなく、歯科医師・歯科衛生士が歯科用CAD/CAMで歯冠をデザインする際にも役立つような、書籍とソフトウェア（デジタルコンテンツ）と実態模型のそれぞれの利点を生かした新しいタイプの教材の開発を進めていく。また、予防歯科医療に積極的に取り組み、プリシードプロシードに基づく「早期介入型定期管理システム」を新たに確立するべく、小児期の口腔衛生指導の方法論を研究することで、口腔医学の発展に貢献していきたい。

第78回（通算第161回）：2015年10月22日（木）

（座長：野村章子）

CAD/CAM冠の製作方法と 開始1年の経過報告

井上 篤（沖歯科工業株式会社）

平成26年4月にCAD/CAM冠が保険適用され弊社では同年10月から製作を開始し1年が経過した。

今回はその製作手順の紹介と1年間の製作実績、再製事由から得られた対応等について説明した。

専用加工機とブロックでの安定した品質とともに、歯科技工士は機器材料を十分把握し、最適な歯冠形態の設計、各値の設定、加工後の内面調整でさらに品質の向上に努めている。安全に使用していただくには、材料の特性を踏まえた案内も必要である。

診療所における訪問摂食嚥下 リハビリテーションの取り組み

小林智美（附属歯科診療所）

牧野真理（附属歯科診療所）

近年肺炎が日本人の死亡原因の第3位となり、歯科での介入の必要性が求められている。

明倫短期大学附属歯科診療所においてもH26.12月より摂食嚥下リハビリテーション外来を立ち上げ、現在では訪問においてもリハビリテーションに取り組んでいる。

今回の月例会では、摂食嚥下リハビリテーション外来立ち上げの経緯、リハビリテーションの役割、外来・訪問での活動内容、具体的に症例を2例、そして今後の展開についても紹介した。

歯科技工室における歯科技工装置の 製作状況について（平成23～25年度）

榎並拓也（歯科技工士学科）

明倫短期大学附属歯科診療所において歯科技工士教員、沖歯科工業出向職員ならびに専攻科生体技工専攻生が製作した歯科技工装置について平成23年から平成25年にわたって調査を行った。平成22年度をピークに年度を追うごとに歯科技工装置の製作数量の減少が見られた。この理由として、教職員と生体技工専攻生の人数の減少が影響すると考えられる特に専攻生数の差は大きい。金属床、エステニアやジルコニア等の自費による歯科技工装置の製作数が、有床と歯冠の双方で少ない。カスタムトレーの数量の増加から、本診療所の診療においてホワイトニングに注力していることがわかる。明倫短期大学附属歯科診療所における歯科技工装置の生産量は、専攻科生体技工専攻生に依存することが示唆された。学内で製作する自費歯科技工装置の数量は、全体と比較して少ない。臨床歯科技工能力と診療所収入の向上のために生体技工専攻生が、自費を含む歯科技工を更に担当できるように、教育の充実が必須である。